

あとがきに代えて

清水九兵衛の芸術について

—条件と存在—

今回の展覧会は清水九兵衛さん(1922~)の新作彫刻展である。展示作品はアルミの大作「MASK連想I」および「MASK連想II」の2点を中心にレリーフ5点、ドローイング3点である。レリーフの材質はアルミを主体とする超可塑性特殊合金SPZであることを付け加えておきたい。この大作2点は、作家の清水さんが当画廊の空間が大変気に入り、この空間に自分の作品を置いて、観てもらいたいとする気持ちが出発点となり、制作されここに展示された。

この展覧会のカタログのテキストは美術評論家の篠田達美さんをお願いし「彫刻空間と質感」——清水九兵衛の彫刻について——をご寄稿いただいた。厚く御礼申し上げます。

清水九兵衛さんの芸術については篠田達美さんの前記エッセーをお読みいただければ充分である。しかし私としては、これまでの清水さんとのお付き合いのなかで、清水さんの芸術について私なりに感じていることがある。そこで、蛇足の感はまぬがれないが、若干申し述べておきたい。

私が清水九兵衛さんの作品を見た、というか意識したのは丹平ビル時の南画廊で、1971年のことである。「アフィニティ」とタイトルがつけられていたアルミの彫刻で、幾分薄暗い画廊空間の床に、這うように作品が置かれ鈍い光を放っていたのが私には心に残る印象としてただいまも鮮やかである。爾来、今日に至るまで、清水さんとの交友が続き、今回の当画廊での展覧会となった。

関西へ旅行すると私は京都にとまることが多いが、その時清水さんと逢って話をすることがある。時には自宅を訪問することもある。清水さんの自宅は京都市東山の清水寺に至る坂、いわゆる清水坂の入口を一寸入ったところにある。清水焼の家元であるという清水さんの一面はつとに関係者には知られていることである。清水焼の地元に清水さんの住まいがあるのはごく自然なことなのである。ところが、ボンヤリしていると入口を見過してしまう。それほど入口は目立たず、狭いのである。最近、勝手に無断で入ってくる人がいるので表の「のれん」をはずしました、とのことで、尚更、見過しや

すいのである。

その門を入り、石だたみの小路を一寸歩くと大きく広がり、その奥に清水さんの住まいがある。応接室に通されて、そこで気付くことがふたつある。そのひとつは棚に透明なガラスの容器がびっしりと並んでいることである。色つきのものは皆無で、かたちもデコラティブなものはない。極めて無機的な表情を示しているガラス容器のコレクションの一群をみるのである。もうひとつは陶器(清水さんの自作を含め)の作品が一切見当たらないことである。このふたつのことは私には大変興味深いところである。このふたつには相関関係があり、清水さんの姿勢が示されている、と私は思う。

清水さんの彫刻の素材がアルミであるということは清水さんの好みによるものであろうが、この無機的な金属を使用するということに、陶器の素材である有機的な土とは異なる、いわば対極のものを使用しているという意識がみえる。つまり清水焼の家元であることから宿命的に陶器にかかわらざるを得ない事情のなか、彫刻家としての仕事を貫くというプロセスで、意識的、無意識的な精神的条件が清水九兵衛の芸術の背後にあるのだ。人間はそれぞれその置かれた条件のなかで生きて行く。さらに言うならば、そのなかで闘って生きて行く。表現はまさしくその闘いのなかから生まれる。

清水さんの作品を私が好ましく思うひとつの点は、そのかたちにある。つまりカーヴする曲面の美しさ、鈍い光を放つ表層の美しさにある、それはクリーンで明快で温かい温度を感じさせる。アルミという素材を清水さんはうまく制御している。二番目にオープンな空間意識を感ずることである。チマチマしていない。ゆったりと大らかなのがいい。清水さんが最初建築を学ばれたことと関連があるのではなからうか？

清水九兵衛の作品はさまざまのものをのみ込んで端正で静かに存在する。そこが私は好きだ。

最後に清水九兵衛さんのますますのご健勝を祈るものである。

1991年5月12日

佐谷画廊 佐谷和彦